01_設計の理念と考え

（1）施設全体の考え方

〇複合施設として

・私たちは本計画を**現代における公共空間づくりの重要な挑戦**と位置づけます。戦後日本建築は様々な質の公共空間を生み出してきました。丹下健三による庁舎建築のピロティに代表される、1950〜60年代の公共空間が受け入れようとしていたのは「群衆」としての市民でした。それに対して今日つくられる公共空間は、個人の自由なふるまいを許容しているように見えますが、見た目の賑わいに比して、人々のふるまい方は極めて均質化しています。それらは商業空間に似通っており、裏と表、サービスする側とされる側がハッキリと別れていることが特徴です。

・本計画では、**個人が独りの居場所を自由に見つけることが出来る**一方、数人、数十人、数百人、数千人という**多様なメンバーとモードで出来事を共有できる**ような公共空間の実現を目指します。その空間において人々は群衆でも消費者でもなく、主体的に学び、議論し、自己表現する個人です。

・その空間は、震災メモリアル拠点と音楽ホールの複合建築という特別なプログラムだからこそ実現可能なものです。そしてその先に、**歴史と文化を共有する強靭な記憶の共同体**が成立すると考えます。

〇震災メモリアル拠点として

・私たちは震災メモリアル拠点を、**この建築の中心となるシンボリックな空間**としてつくり**「メモリアルステージ」**と名付けます。

・そこには、仙台開府以来の都市災害の歴史や、震災文学・映画等のアーカイブに触れられる空間や、市民の研究・学習・創造を支援する諸室を立体的に配置し、そうした資料や活動を空間に視覚化します。

・訪れる多世代の人々が災害を自分ごととして捉え、共同体の記憶として共有、継承し、災害文化を醸成していくための拠点を目指します。

〇音楽ホールとして

・ホール建築は、情報化が進む現代において、大勢の人々が実空間を共有する必然性を持つ数少ないビルディングタイプです。しかしながら今日、多くのホールは、限られた公演時間以外は人々の居場所とはなっていません。それらは公演直前に開放され、終演後はただちに閉鎖され、人々はベルトコンベアのように追い出されるのが常です。

・それに対して私たちは、**集まりの場としてのホール建築**のあり方を再発見したいと思います。開演前に人々が自由に集まってきて時間を過ごす。ホール内部においては、観客同士が互いの存在を視認し合い、同じ空間を共有していることを実感できる。終演後は屋外も含めた様々な居場所で自由に余韻を楽しみ、四方八方にゆっくりと散っていく。そんな構造を持ったホールを提案します。

・またこの建築では公演だけでなく、音楽や演劇を創るプロセスも同じくらい重視します。制作や練習、発表の場が建物の内外に数多く散りばめられ、**人々の表現意欲を喚起・応援する建築**です。

（2）不確定要素を許容したまま進んで行ける建築

・現時点で与えられた設計要件は不確定要素が多く、設計期間を通じて今後も変わり続けることが予想されます。このような場合、建築の提案には、不確定要素を許容したまま進んでいくことができるフレキシビリティが求められます。

・私たちは、リジッドな全体形ではなく、**柔らかいルールで統合された不定形な全体像**を持つ建築を提案します。多くの関係者の意見や、状況の変化を受け入れ、なお全体像を保ち続けられる建築です。

（3）仙台の新たな中心となりうる建築

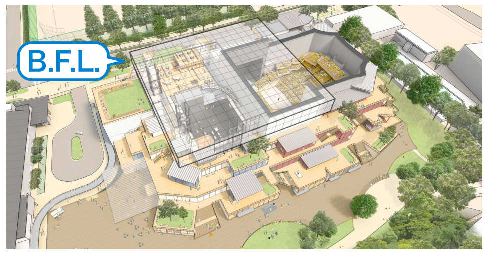
・音楽や演劇ファンの限られた利用者だけでなく、広く仙台市民に開かれた記憶のコミュニティを形成するためには、**都市スケールで見た時にも、確かな存在感を持つ空間**が必要となると考えます。

・広瀬川東岸から見た際にも集まりの場として視認でき、青葉山地区を仙台の新たな中心として位置づけ直すような力のある公共空間を目指します。

（4）周辺地域を活性化する建築

・広瀬川沿いの遊歩道と一体空間を形成し、閉館時にも誰もが自由に通り抜けられる建築とします。国際センター、宮城県美術館、東北大学等の周辺施設と連携しながら、歩いて楽しいエリアの形成に寄与する建築です。

（5）提案する建築の姿



・（1）〜（4）で述べた建築を実現するために私たちは**「ビッグフライ・ロフト」**と呼ぶ大屋根の下にうまれる**大きな公共空間を中心に、様々な規模の集まりの場が集合して出来あがる建築**を提案します。

02_コスト縮減に関する提案

コスト縮減のためには下記のような作業が必要と考えます。

（1）建物規模の絞り込み

・複合施設における必要諸室の設計要件は往々にして過剰になりがちです。多くの関係者へのヒアリングと詳細な打ち合わせを通じて、共用可能な空間をあぶり出し、**床面積を可能な限り絞り込みます**。

（2）必要にして十分なスペックの設定

・建築、設備、舞台設備、外構、それぞれの領域において関係者と強度の高い議論を行い真に必要なスペックをあぶり出し、引き締まった建築にすることが最重要と考えます。

（3）材料選定

・原則としてシンプルで凜とした建築と空間を指向し、材料に過剰なコストを掛けません。華美な仕上げで「ハレ」の空間をつくるのではなく、**人々の活動やコンテンツにより、「ハレ」と「ケ」が時に入れ替わるような建築**です。

（4）施設内における設備の共用

・メモリアルステージ、大ホール、小ホールで照明や天吊り装置等を共用。その他、大ホール客席のモード転換の際も座席を組み替えて活用するなど、アイテムを館内で共用することで、**実装する設備・装置のボリュームを最小化します**

03_将来の大規模修繕を想定した設計上の配慮

（1）建築

・20世紀後半に建設された多くの複合公共施設は、特定の機能と結びついた特殊な空間の集合体としてつくられました。今日、そうした建築が改修の時期を迎え、空間の冗長性の不足に起因する様々な問題を引き起こしています。

・私たちの提案は、明確な全体構成のもとに大中小様々な大きさの空間が集合した建築ですが、ホール以外の室は機能を特定せず、使い方を入れ替え可能な空間とします。十分な階高やシンプルな設備ルートの確保など適切な骨格を与え、**短期的・長期的な使用状況の変化にいずれも柔軟に対応可能な建築**とします。

（2）構造

・鉄骨造を主体とし、ホール等遮音が必要な空間はRC壁で遮蔽します。このRC壁を耐震要素とすることで、構造壁が少ないフレキシブルな建築とします。

・ビッグフライロフトは高さ4mのフィーレンデールトラスとすることで柱が少ない大スパン空間を掛け渡します。トラス層は人や舞台機構が自由に移動することが可能で、将来に渡って館内の多様な活動をバックアップします。

（3）設備

・意匠と設備を一体的に計画することで、徹底した建物負荷の低減を図ります。仙台ならびに計画地の環境特性を活かした外気冷房や自然通風、建築の特徴を活かした自然採光など、自然エネルギーを最大限に活用した上で、高効率システム・機器を導入。**メンテナンスが必要な設備容量を最小化**します。

・用途に合わせたメリハリのある設備計画とし、ホール等の大空間以外は個別空調とするなど、**部分更新が容易なシステム**を構築します。

・搬出入経路の確保、配線・配管ルートの集約、無駄のない予備スペースの確保等の設計方針を徹底し、大規模改修に備えます。

（4）舞台設備

・舞台機構・音響・照明に関し、建設時に過大な設備を導入することは、維持管理ならびに将来の更新における大きな負担となります。多目的ホールに無限の可能性を求めるのではなく、施設管理者との緊密な議論を通じて使用頻度の高い幾つかのモードに絞り込むことで**必要にして十分なスペック**とし、イニシャル、ランニングコストともに縮減します。

04_徹底した対話型の設計手法

01〜03で述べた方針を実現するために、下記のような設計体制、設計プロセスで業務に取り組みます。

（1）情熱と経験を併せ持つメンバーで構成する設計チーム

・多くの関係者が関与する大規模公共建築の設計経験が豊富なメンバーでチームを構成します。前述した設計理念を共有し、一丸となって過去に類を見ない公共空間の実現に邁進します。

（2）プロジェクト会議の発足

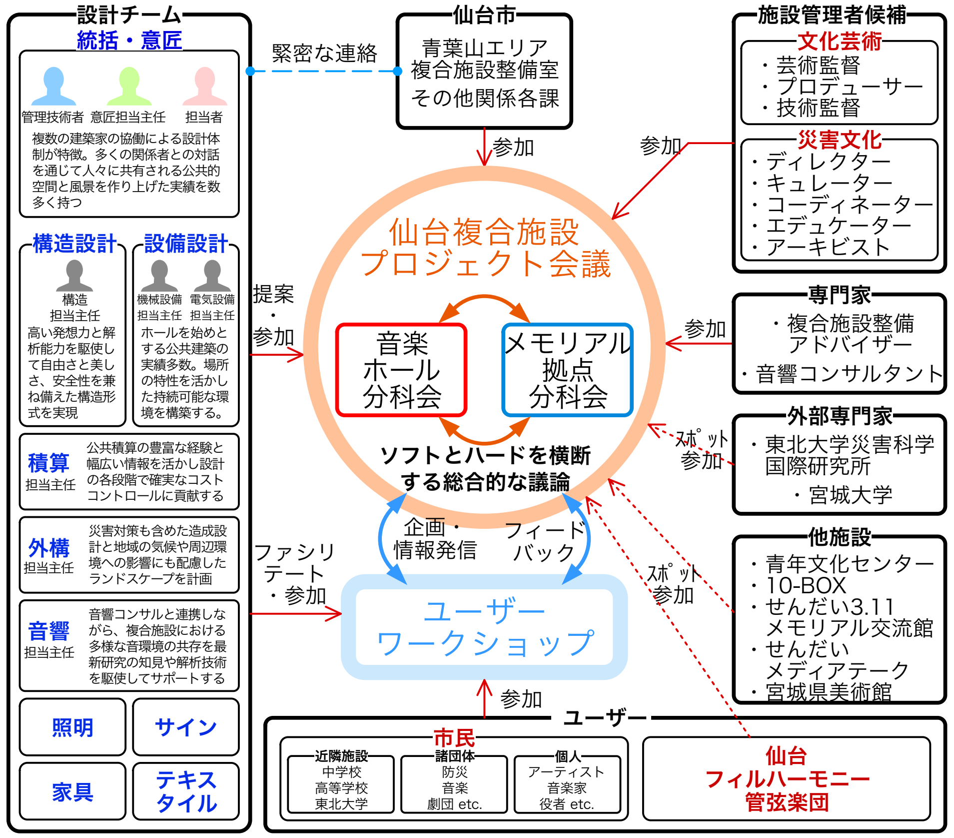
・意志決定の場としての**「プロジェクト会議」**を立ち上げ、ハードとソフトを横断的に議論する場とし、関係者の意見や利害関係を調整します。

（3）徹底した対話型の設計手法

・施設管理者、仙台フィル、演劇関係者を始めとする将来の施設利用者と徹底した対話の場を持ち、その議論を設計内容にフィードバックします。必要に応じて設計ワークショップを開催し、関係者の皆さんにも**当事者としてあるべき建築のあり方の議論に参加していただき、共に設計案をつくりあげます。**

（4）専門家との緊密な連携

・複合施設整備アドバイザー、音響コンサルタントを始めとする専門家と緊密に連携して設計を進めます。



これまでに数々の公共建築づくりのワークショップを企画・運営してきたノウハウを本プロジェクトにも最大限に投入します。

集落の記憶を保つ新しい町の姿を議論
(某市防災集団移転WS/ 2012)

学校づくりを通じて地域の未来を議論
(某市中学校づくりWS/ 2013)

複合施設のあり方をユーザーで議論
(某市図書館づくりWS/ 2018)

05_階別面積表

5階	820 ㎡
4階	3,670 ㎡
3階	4,940 ㎡
2階	7,410 ㎡
1階	9,580 ㎡
B1階	5,010 ㎡
合計	31,430 ㎡

整理番号